

# 「抗精神病薬」の副作用について

H28.4.13 神戸医療センター せん妄チーム／緩和ケア室

NHKで、認知症を有する患者さんの幻覚などに「抗精神病薬」を投与すると死亡率が上昇する、説明している医師は30%に満たない、という報道がありました。

「抗精神病薬」は、幻覚／妄想などを抑える薬剤として、「認知症」や「せん妄」といったいわゆる精神病以外の方にも広く使用されています。特に65～70歳以上の方については、認知症の有無に限らず入院治療をうけられるすべての方で、幻覚などが生じる「せん妄」が合併しやすくなることが知られています。このような状況では、もともとの治療の安全が保てなくなり、時に生命に関わるような危険な状況になることもあります。世界的にこのせん妄に対する治療に一番最初に使う薬は、「抗精神病薬」です。

一方で、以前から「抗精神病薬」を認知症の方に使用すると死亡率が上がるのではないか、という指摘がされており、慎重に投与することが医療界でも啓蒙され始めています。

当院では、以下の考えを基に診療しています。

■報道された副作用の多くは、従来から全国的に使用されていた「抗精神病薬」の量が多すぎることによるもの可能性が高く、当院ではそのような量を使わないような対策をすでに進めています。

■薬はすべて副作用があること、頻度が少ないものまで含めると膨大になるため、すべての副作用をご説明するのは現実的ではありません。「抗精神病薬」の安全には十分配慮しているため、一律に「抗精神病薬には死亡のリスクがある」と単に不安を煽るだけの恐れが強い形式的なご説明はしておりません。

一口に副作用と言っても、使いすぎることによる副作用と、通常の使用量による副作用は分けて考える必要があります。特に「抗精神病薬」の使用については、従来から精神科での使用量が基準になっており、近年、精神科でも「抗精神病薬」の使用量が多すぎだった、という見直しがされてきています。また、使用量が多いほどこの死亡率の上昇の危険が高まる研究結果も出され、死亡率の上昇が見られない研究もあることから、適量では上昇が見られないのではという意見もあります。

当院では以前より、最新の研究結果を踏まえて「抗精神病薬」をなるべく使わなくて済むような「せん妄対策」を全国的みても先駆的に開発しています(<http://せん妄.jp>に掲載)。

- 1) 内服できる患者さんには、第1番目「抗精神病薬」ではなく、副作用の少ない他の種類の薬剤を使用しています（近年、こちらの薬が推奨されることも多くなっています）。2番目以降で、少量の「抗精神病薬」を使用する場合があります。
- 2) 注射では「抗精神病薬」を使用せざるをえませんが、最新の研究結果をもとに、副作用が発生しにくい最適な少量（例：注射1本の10分の3量）を基本として使用しています。

今回の副作用は必要最小限に適量を使用すれば、十分回避できる可能性が高いと考えています。そのため、患者さんの治療／生命の安全を守るためにやむを得ず「抗精神病薬」を使用する場合には、副作用の恐れが少ない量の使用を行っています。

このように、患者さんの安全な治療を受けていただけるように配慮しておりますので、ご理解いただけますと幸いです。また、ご不明な点は、主治医／薬剤師にお問い合わせください。